

台湾茶の歴史を訪ねる 第十九回

(19) 光復後 台湾茶業を支えた福建人たち (2)



須賀 努 (コラムニスト/茶旅人)

前回は中国茶業界のレジェンド、張天福と彼が作った福安農学校、そして台湾茶業の父とも称される呉振鐸との繋がりを通して、福建と台湾の知られざる茶業の繋がり、光復後の台湾茶業の一端を見てきた。今回は更にディープに、台湾でも一般にはほぼ知られていない台湾茶業の恩人、林馥泉と林復を取り上げてみたい。

林馥泉氏のこと

林馥泉は3人の中で一番早くに亡くなり、既に40年近くが経過していることもあり、その一生を知ることは困難であった。特に渡台前については極めて資料が乏しい。林は1914年、福建省晋江(恵安)の生まれで、呉振鐸、林復と比べれば年長者となる。現在台湾に残されている資料によれば、上海の大学を卒業しているが、福安農学校にいつ入学したのかはよく分からない(卒業名簿もなく、校友名簿にも名前はない)。筆者は勝手に、呉、林復と並び、1935年に入学し、1年間、張天福の下で学び、その後茶業に従事したと思いたいが、それを証明するものが見つかっていない。

1936年に福建省農教師訓練所に入り、1938年には福建示範茶廠制茶所武夷所主任になったとされている。1941年には故郷に戻り泉州民生農学校教師となったとの話もあるが、一方企山直属製茶所主任であったという資料もある。張天福関連の写真を眺めていると、1941年に福建示範茶廠の工員が武夷山大王峰に登っており、その中で張天福の隣に林馥泉が座っている。この頃既に張と林は共に茶業に尽力していた様子が窺われる。

1942年には武夷山茶業調査を敢行し、福建示範茶廠制茶所主任となり、有名な『武夷茶業之生産製造及運銷』を出版している。既にこの時点で林馥泉は福建茶業界では名を知られた存在になっていたと推察される。



林馥泉 (1966年当時)



張天福 (右3番目) と林馥泉 (右2番目) 1941年



『武夷茶葉之生産製造及運銷』

1945年10月、庄晩芳と共に台湾に渡り、台湾省茶業会社に所属。三井など茶業関係の日本資産の引き渡しに関わったと言われており、そういう意味では日本とも関係のある人物だ。庄は任務終了福建に帰国したが、林は何故かそのまま残り、その後亡くなるまで一度も福建に帰ることはなかったと聞く。資産引き渡しの功績により、政府から運転手付きの黒塗りの車が与えられた、などの噂もあるので、その業務はかなり大変、かつ貢献度の高いものだったと考えられる。

因みにこの庄晩芳とは、林と同じ福建省晋江の出身。1930年代は安徽祁門茶葉改良場の技術員、そして武夷山では張天福の下で福建示範茶廠副廠長を務め、新中国後は安徽農學院教授、浙江農業大學茶學系教授などで活躍し、茶に関する著書も多数ある、中国を代表する茶業専門家である。彼のような大物が林らを率いて、日本資産接収の中心であったことは間違いなく、その作業の重要性が分かる。

また台湾の資料によれば、三井などの資産を受け継いだのは、台湾省茶業公司という会社となっており、そのトップは茶商公會理事長、王添灯だっ

た。この王添灯と中國大陸から派遣された林馥泉ら茶業専門家が如何なる関係にあり、どのような業務をしたのかは、今となっては調べる術もなく、歴史上の謎であろう。

その任務が済むと、彼はすぐに林口にあった茶業伝習所の接収を命じられ、所長に就任する。茶業伝習所とは、日本統治時代の1930年に開設された台湾人茶農を育成するための学校で、14期、400人以上がここを卒業、日本時代の台湾茶業を支える人材を輩出していた。だが、戦争が激化した1944年に募集活動停止に追い込まれ、物資の多くは徴用され、アメリカ軍の空爆で荒廃した。

日本資産に続いて林馥泉はこの伝習所の接収を行政長官公署から命じられ、その整備、復興に尽くし、生徒の募集を再開した。1946年10月には光復後第1期生を迎え、翌年37名の卒業生を出し、その後も第3期までの生徒を担当、1950年に所長を退任、茶業試験所の技正となる。因みに後任は林復であり、茶業試験分所の分所長は呉振鐸。福安農学校の卒業生たちが活躍し始めた時代だった。

林が所長をしていた伝習所に光復後第3期で入

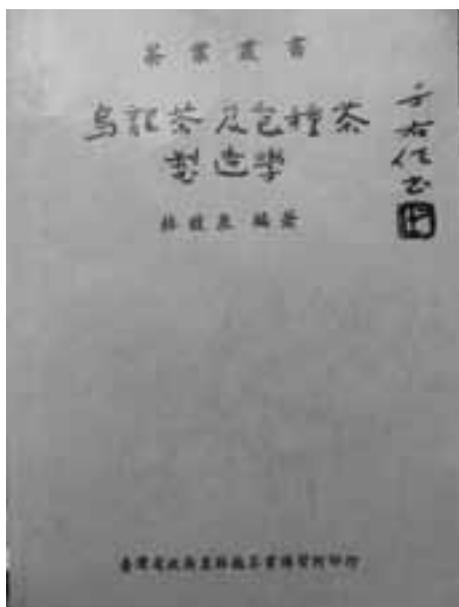


1946年 茶業伝習所所長任命書

学した石朝幸氏（魚池在住 和果森林経営）も『林先生は茶業全般を講義されたが、話が上手で分かり易かった。更に国語は勿論、泉州出身なので閩南語も出来、生徒は大いに助かった』と回顧する。そして1970年頃、紅茶輸出に陰りが見えた頃、魚池・埔里に合作社を作った際も相談に乗ってもらったと、非常に感謝しており、気さくで面倒見の良い先生だったようだ。

伝習所所長となった時、彼は同時に台北製茶廠の廠長にもなっており、この茶工場は台湾農林に引き継がれていくが、林は長くこの工場の復興、生産拡大にも努めたようだ。1954年には台湾区製茶工業同業公会が設立され、林はその理事に就任する。その時の肩書は『台湾農林公司茶業分公主任』。1956年の改選では常務理事となり、公会の中核的な役割を担っていたと考えられるが、彼がどのような経緯で公会と関わったのかは今となっては分からない。

ちょうどこの1956年、林は『烏龍茶及包種茶製造学』という本を出版している。この本は中国と台湾で培った烏龍茶に関する良著であり、今でも生産者などのバイブルになっている。その初めに



『烏龍茶及包種茶製造学』

著者による『編著大意』が書かれているが、その中に『茶業試験分所所長 呉振鐸学長』に修正してもらい、農林庁の審査に合格して出版できたことに感謝している。この呉振鐸『学長』とは、どのような意味だろうか？合わせて『農林庁技正 林復』にも感謝しており、この頃の3人の交流の様子が窺われる。

公会50周年を記念して出版された資料を見ると、1957年に常務理事だった林は、公会理事長の要請により総幹事を兼務して、その屋台骨を支え、1959年には理事選には出ずに、公会業務多忙につき、総幹事職に専念している。この時に台湾農林を離れたのではないかと考えられる。

1950-60年代の台湾茶業、特にその輸出は最盛期を迎えた。しかも北アフリカ向け緑茶から、包種茶、紅茶、更には日本向け煎茶まで、その商品も多岐にわたり、公会業務も多忙を極めた。林も茶業専門家として、大車輪の活躍をみせ、公会に大いに貢献した。製茶公会顧問の黄正敏氏は『林馥泉こそ、光復後の台湾茶業を支え、最も貢献した人物だ』という。その理由は『公会が一番忙しい時にその舵取りをした』こと、特に『話がうまく、文章が書けて、教えるのも得意』、こんな傑出した人物は他に見当たらないと語っている。

現在分かることは、毎月発行されていた公会の冊子『茶旬』の編集を欠かさず行っていたことだろう。この冊子は国内外の茶業の情勢、特に市況などを詳しく報じており、茶業者にとっては無くてはならないものだった。1957年の総幹事兼任時に発行をはじめ、1967年にはページ数を増やし内容を充実させている。また1968年には茶業を承継する若者を集めて『青年業者経営改進黨研習班』を連続3回開催し、今後の茶業を担う人材育成にも力を発揮している。

1973年緑茶輸出量が最高に達したその年、彼は総幹事職を辞め、専門委員になっているが、辞職理由は個人的に事業をするためとだけ書かれてい

る。因みにその後任になったのが、農林庁からやって来た林復。伝習所以来、2度目のリレーとなったのはよほどの因縁だろうか、それともお互いに連絡を取り合って、先輩の林馥泉が林復を招いたのだろうか。ただ専門委員となっても彼は積極的に発信を続け、茶旬にも頻繁に記事を載せている。

彼の個人事業とは何だったのか。当初の活動はよく分かっていないが、ちょうど台湾茶業界が『輸出から内需へ』転換する時期に当たっており、台湾人が普通に飲む茶の普及に関心を持っていたフシがある。1980年には大稲埕に長く店を構える王有記と提携し、森林北路に『馥茗堂』という茶荘を開設している。この店こそが彼が最後に目指した『台湾茶業の在り方』を示したものだっただろう。

国史館が出版した『台湾茶業人士訪談録』の中に、王有記の4代目王連源氏のインタビュー内容が収録されているが、それによると『林馥泉の希望は、茶の平民化、生活化』と書かれている。これは一般台湾人が生活の中で常に茶を飲めるようにすることを意味すると思われる。具体的には誰でも飲める、安価で良質のお茶を提供すること、茶葉の等級毎に価格帯を定め、消費者に分かりやすい茶を目指す。これは現在でも議論されている内容であり、先駆的思考だったと言えよう。

残念ながら、店を出してすぐ、理想が現実になる前に癌に侵され、1982年台北で70歳(数え年)の生涯を閉じている。木柵に彼の功績をたたえる記念館を建てる話も出ていたが、実現されることもなく、いつしか世の中から忘れ去られたのは残念でならない。彼の死亡を伝える新聞記事には、生前交友関係があった人々が集まり彼を偲んだとあるが、その中に林復の名前はあるが、呉振鐸の名前はなぜかない。

林復氏のこと

林復は1919年2月26日福建省福安生まれで、今年101歳。今回取り上げる福安農学校第一期卒業生の唯一の存命者である。内向的な性格とも言われており、一番目立たない存在だった。1935年に福安農学校に入学(初代校長張天福、同級生呉振鐸)、ここで1年勉強した。

その後他の学校に行っていたが、ほどなく高級職業学校に昇格したため、再び学び始めたという。この学校は前回述べた通り、全中国で唯一の茶業専門科であり、モデル茶園や茶工場があり、ここで3年みっちり茶業修行をした。更に大学にも進み、園芸科に籍を置いたと言うが、戦争中にどれだけ勉強ができたのだろうか。

1945年に大学を卒業、母校で1年教鞭をとる。1946年当時の台湾省行政長官公署で財政処長をしていた江蘇省蘇州出身の嚴家淦が優秀な専門家を探しているとの話を受け、大学を卒業後、中国国内が内戦の混乱期でよい仕事できなかったこともあり、自らの意思で台湾に渡ることを決めたという。呉振鐸より1年早い渡台だった。

尚この嚴家淦とは当時日本資産処理委員会主任の職にあり、三井をはじめとする茶工場などの茶業資産を接収した責任者(その実働部隊が林馥泉

宁德地区(市) 农业学校校友名录						
一、1941届-1949届						
茶叶1941届						
林復	林復	林復	林復	林復	林復	林復
林復	林復	林復	林復	林復	林復	林復
林復	林復	林復	林復	林復	林復	林復
茶叶1942届						
林復	林復	林復	林復	林復	林復	林復
农学1945届						
林復	林復	林復	林復	林復	林復	林復
林復	林復	林復	林復	林復	林復	林復

福安農学校 校友会名簿

ら)でもある。更にその後中華民國の重職を歴任し、1975年に蒋介石が亡くなると、名目的ではあったかもしれないが、後継の第5代総統に就任した大物である。

台湾では専売局の事務員として採用された林だが、すぐに林口茶業伝習所に配属され、教導課課長として、先輩の林馥泉所長と共にその復興に尽力した。林口で結婚し、長女が生まれている。因みに奥さんは姉妹で來台し、もう一人は農学校同窓、伝習所同僚の李孟昌と結婚したと福州で聞いたが、本人には確認できていない。

李孟昌は『茶園耕作方法浅説』(1951年)や『工夫紅茶製造法』(1957年)などの教科書を執筆しており、優秀な教師だったとの話を卒業生から聞いている。また福州では『2005年に張天福先生茶業従事70周年イベントがあった際、天福茗茶李瑞河総裁や元茶業改良場長、阮逸明博士などと並んで、李孟昌氏が出席していた』との証言を得た。李氏がいつまで茶業に関わったのかは分からないが、実は彼も重要人物であったはずである。



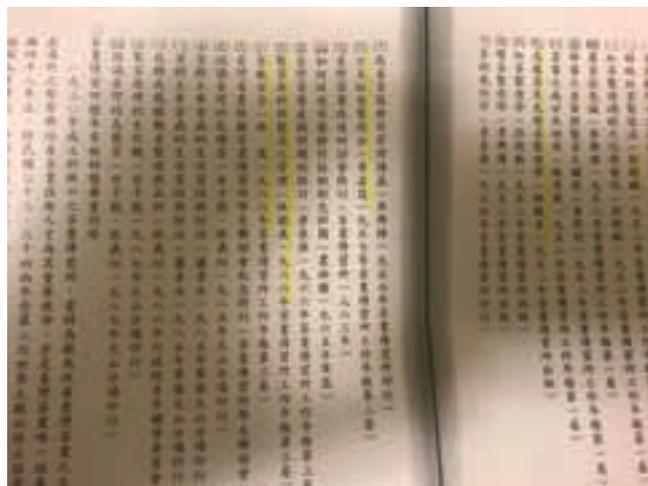
茶業伝習所任命書

光復後の混乱期、福建から渡ってきた若者で、子供が生まればかりの家庭には、物価上昇がかなり堪え、生活が大変だったらしい。そこで給与アップを農林處に申請した文書も残されているが、その申請書には『茶業経験があり、職務にも努力している』と書かれている。申請者は林馥泉である。

1950年林馥泉の後任として、茶業伝習所所長(伝習所には通算5年勤務し、教え子は1期30人、合計150人に上る)となる。教え子の一人、光復後第5期卒業の王如昌氏(卒業後は魚池の日月茶廠勤務、現在魚池在住92歳)は、『林先生は既に所長(校長)職を下りていたが、主に育種、剪定などの授業を行っていた』と話してくれた。尚林馥泉は閩南語を話せたが、林復は全て国語で会話していたと聞く。

その後台北と中興新村で農林庁特産科に勤務した。その頃、台湾は光復後の緑茶生産が盛んになっている。これは日本統治時代にはなかったことで、上海の唐季珊が釜炒り緑茶の製法を台湾に持ち込んだ。林復は『1950年代、唐季珊の緑茶製造における貢献は非常に大きかった。唐氏はとても人柄がよく、奥さんは美人だった』と懐かしそうに語っている。

1958年魚池茶業改良場分場長となっている。



林復、林馥泉ら作成資料一覧



林復 2018年9月

ここでは当時始まっていた東部の茶業開発にもかかわり、1959年には呉振鐸と共に台東、花蓮を視察、16か所に試験的に茶樹を植え、その後魚池分場として、瑞穂と美濃などに茶苗試験場を設置した。

分場長を辞した1960年、政府の要請でリビアに赴き、茶業指導をした。『リビア政府の要請で現地に茶樹を植えたが、乾燥した気候、そして海水の塩分を含む土壌から茶業を断念した』と回顧している。その年は北アフリカが緑茶輸入に制限を掛けた時期と重なることから、現地政府は自力で茶葉生産を目論み、専門家として招聘された様だ。

1960年代は農林庁で、台湾茶業の新たな試みを実践していく。台湾東部、台東（鹿野）、花蓮（瑞穂）に行き、茶業の可能性を探った。1960年代の花蓮は鶴岡で土地銀行が茶業をしていただけだった。『1960年代には静岡なども訪問して、煎茶の製造法も見学した。日本の茶業博にも参加したよ』との話もあり、東部で煎茶作りの可能性も視野に入れていた。

1973年に農林庁を退職、製茶公会総幹事任就任。これは農林庁と公会のパイプ役を期待されて

のことで、前任の林馥泉とは役割が多少違っていた可能性がある。台湾茶の輸出もピークを過ぎ、公会の仕事量も減少傾向にあった。公会に出勤するのは週3日程度で、各茶産地などに出張して、引き続き茶業発展に尽くし、その情報を茶旬に書いていたという。

1975年既に農林庁は退職していたが、自らが仕掛けた、『台湾茶の輸出から内需へ』を目指した新店包種茶コンテストに姿を見せており、翌年のあの有名な鹿谷の凍頂烏龍茶コンテストでも呉振鐸、農林庁の後輩張瑞成と並んで審査員を務めている。その後も各地でコンテストが開かれるようになり、審査員として招かれることが多かった、と聞いている。

呉振鐸は品種改良とその試験を専門的に行い、林は役人としてそれらを広める宣伝活動に従事して、彼らは台湾茶業の両輪として活動していたともいえる。ただ林復自身『高山茶を最初に栽培することには賛成したが、阿里山など高度が上がっていくことには、土壌の問題による土石流などの心配もあり反対した』とはっきり述べている。ここでは高山茶を推進した呉と意見、立場を異にしていたようだ。



『台湾茶人採訪錄』（范增平）

1987年14年間務めた総幹事を退任、引退生活に入る。100歳を迎える2018年に直接お会いした際も、少し足が悪く、目も見えにくいと言って

はおられたが、大変元気でこちらの質問にもきちんと答えてくれ、如何にも誠実さを感じさせる人物だった。

2001年に出版された『台湾茶人採訪録』の中で、著名な范增平氏が、林復にインタビューした記録を発見した。それによれば普段は取材などの訪問は受けない林が珍しく応じ、気さくに台湾茶の過去と未来を語っていた。『茶藝の資料を探し、整理し、また陸羽の『茶経』を翻訳するなど、茶藝界のために黙々と作業するのみ』と語っているのが如何にも林復その人であった。

最後に昨年新竹関西に台湾紅茶の羅慶士氏を再訪した。羅氏は呉振鐸、林復、林馥泉のいずれとも製茶公会などの活動を通して付き合いがあった人物。彼の3人に対する人物評は『一番商売に近いのが林馥泉、誠実な役人タイプが林復、厳格な学者タイプが呉振鐸』とのことだが、さてどうだろうか。